
マイ ブレイン ワールド

紅炎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マイブレインワールド

【Nコード】

N5634R

【作者名】

紅炎

【あらすじ】

魔術師たちの短い物語。

時系列も何もばらばらだけど、これらは繋がっている。
いずれまとめます。

※計画では三作（三シリーズ）にまとめます。

初めにお読みください

「マイ ブレイン ワールド」とは、一つの世界観の中で繰り広げられる物語の集合体です。

題名の通り、「私の脳の世界」となっています。

そのため、形式としては短編集となっています。

いずれはいくつかにまとめようと考えています。

注意として、時系列がばらばらになっていること、一話一話が短いと言うことを頭において閲覧してください。

最後になりましたが、「マイ ブレイン ワールド」を開いてくださりありがとうございます。

それではお楽しみください。

魔術的張り紙（前書き）

すみません。連載に変更させていただきます。

魔術的張り紙

《魔術的よろずや》

買い物、洗濯、庭の手入れ、配達、引越し手伝い。何でもご依頼ください。

習得している魔術を駆使して、すばやく行います。

まずはご相談ください。

事務所は角を左に曲がった先のレトロな煉瓦造りの建物。

木の扉を開けてください。

午前6時から午後8時まで・年中不定休で営業しております。

どうぞ、お気軽にお越しください。

「何このチラシー」

「ちょー怪しいんですけどー」

「きゃはははは！」

耳障りな笑い声を残して女子高生たちはチラシから離れていった。
まあ、確かに怪しいが。

「くそ！あの先公今に見てろよ！」

「またまた」。美人先生に叩かれて、こっそりハアハア言っていたくせに」

「う、うるせえ！ そんなことしてねえ！ ……くそ！」

男子生徒が赤面しながらポスターをビリビリと破り剥がしていった。友達は楽しそうに見ている。

あーあ。破られちゃった。所長の（本人曰く）最高傑作がビリビリに。

「学校を半日サボって観察した結果はつと。

・ 見向きのしなかった人は12人。

・ 店名だけ見た人は10人。

・ 本文を半分読んだ人は5人。

・ 本文を全て読んだ人は3人。

・ さらに来店意欲のありそうな人は……0人」

プラス、破いていった男子高校生が1人か。悲しい結果だな。

所長に報告したら何て言うだろうーとか考えながら、僕は煉瓦造りの建物へ足を向けた。

「うん。次はマリさんにポスターを作ってもらおう」

黒紙に修正液の文字で書かれたポスターなんて、あまりに受けが悪すぎた。

誰もいなくなった路地。そこは、ポスターがひとりでに直っただけだった。

魔術的張り紙（後書き）

改めてお詫び申し上げます。

そして、これからもよろしくお願いいたします。

2011..09/09 少し修正。

洞窟にいる闇の精霊、未知の魔術師を待つ

洞窟の中は暗い。太陽光は一切ない。あるのは、侵入者の持つ儂げなランプのみ。洞窟の闇は貪欲にその明かりさえも呑み込もうとしている。

両手を広げれば両壁に手が届くほどの狭い岩穴の中を、1人の人間が慎重に進んでいた。片手を岩壁につけてもう片方の手でランプを掲げている。

人間はぐっしりと濡れた、フード付きのマントを着ていた。茶色のマントは薄汚れて裾がぼろぼろになっていた。絶える事無く水の雫が落ちている。

「くそ、油断した。あんな簡単な罠にはまるとは」

人間の言う罠とは、洞窟の途中にある単純な落とし穴のことだ。深さはさほどでもないが、地下水がたまって深い水溜りになっていた。人間は先ほどそこにはまった。見事、きれいにはまったのだ。咄嗟にランプは放り投げて灯りを失うことは無かったようだが、全身ずぶ濡れになったのだ。

「魔術が使えれば、こんな水など一瞬で乾かせるのに：不便な洞窟だ」

そう。この洞窟では魔術が使えない。その理由は詳しくは分かっている。ただ、『闇が魔術を喰らう』という話が人々の間で囁かれている。そのため、この洞窟に人が寄ることは無くなった。特に、魔術師は自らの力が消えるのを恐れてその山自体に近寄ることが無かった。

しかし、何事にも例外があるようで、この魔術師の人間がその証拠だ。

『闇が魔術を喰らう』という話が、この人間には面白く聞こえて興味を掻き立てられたのだろう。そうでないとこんなところまで来る人間はいない。

「力の流れはない：いや、かすかに奥から流れてきているな。」

人間の後ろに岩が落ちてきた。ズンツという重々しい音と共に、それ相応の震動が人間の足の裏に伝えられる。しかし、人間は見向きもしない。

「流れていると言うよりも、充滿していると言ったほうがいいだろうか。」

人間はいったん立ち止まり、岩壁に付けていた腕を振り回した。それによって空気が、闇がかき混ぜられる。人間はしばらく辺りを振り回した後、満足顔で片手を岩壁に付けた。

「やっぱりそうだな。力が充滿している。媒体は：やはり闇か？」人間は再び歩き出した。今度は何かをぶつぶつと呟いている。独り言の絶えない人間だ。いや、洞窟を支配する闇がそうさせているのかもしれない。

濃い闇はありとあらゆるものを吸収する。勿論音も吸収する。そして、生き物は音が消えるとその存在を保つことが出来なくなってしまう。故に、生き物は自ら音を発してその存在を保とうとする。この人間のように。

「そうだな：やっぱり『監視』されているのかな？」

人間は唐突にそう呟いた。気に食わない、とも言った。

「一方的にやられるのは、性に合わない。」

人間はいきなり歩くのを止め、ランプを高々と掲げた。

「火ニ宿リシ炎ノ精ヨ！其ハ誇リ高キ紅蓮！闇ニ挑ミシ気高キ闘志！」

人間が高々と謎の言葉を発したと思いきや、ランプの火が急激に強くなった。人間の周囲を囲っていた闇は駆逐され、数十m先の道さえも照らしてしまった。

「何だあいつは」

私は暗闇の中で呟いた。いや、私は私の中で呟いた。

あの火の強まり方は確実に魔術だろう。だが何故この洞窟の中で、この私の中で魔術が使えるのか。それに、あの言葉は呪文なんだろうが、あのような呪文は聞いたことがない。系統も何も分からない、私の知らない魔術だった。

そう思った途端、私の口角はつりあがった。

「私の…知らない…！」

面白い。面白い。あの人間は面白い。私の中で魔術を使ったこともそうだが、私があの人間を覗き見していることにも気づいた。しかも、警戒をしていなかったとは言えこの私を力で押し返した。今までこんな人間はいなかった。

面白い。

「あの人間は、ここまで来れるのかな？」

ぜひとも直接会いたいものだ。どのような人間なのか。

魔術師の人間が歩いている頃、

縛られし闇の精は洞窟の最奥でひそかに笑っていた。

洞窟にいる闇の精霊、未知の魔術師を待つ（後書き）

お読みくださりありがとうございます。

ご指摘・ご感想をお待ちしています。

三年前の別離（前書き）

今回は少々血生臭いです。お気を付け下さい。

三年前の別離

周囲の山々は光の網に包まれ、村には滅亡が訪れた。

「神よ。僕に土地の力をくれるかい？」

「断る。」

社の柱にもたれかかって座り込み、破れた狩衣を着ている神は言った。

神の目の前に立つ金髪の青年は、腕をゆっくりと広げた。

「何故だい。土地の力を手放したって、君は消えることは無いでしょ？ なんだって、君は元々魔物だったんだしさ。」

それを聞いて、神は青年を睨みつけて、嘲笑うように言い放った。

「は。若僧が何を言う。我はこの地選ばれし誇り高き大妖怪にして、この地を守り支配する神。」

そして、誇り高く何かに宣言するように言い放った。

「我は土地の力を何者かに譲り渡すことはせず、この地を離れることも無い。例えどれほどの滅亡に襲われようとも、我は最後まで戦い、この地で力尽き果てるのだ。」

これを聞いた青年はしばらく目を丸くしていたが、やがて声を上げて笑い始めた。

「ははは！ そうかい。君は侵略者と戦い続けて死んでいくのか！ それはそれは誇り高いことで。」

苦しそうに腹を抱えて笑っている青年を、神は黙って見ていた。しばらくすると青年は落ち着いたようで、また話し始めた。

「でもね、そんな状態でどうやって戦うって言うの？ しばらくすれば村で力を付けた部下が来て、君の力を奪い取る儀式が始まるよ。それにしてもこの聖域は厄介だよね。山の中腹にあるから、石段を

登るまでに力を消耗しちゃう。」

青年の話を聞いた神は目を細めた。

「力を付ける、とは一体どういう意味だ？」

この問いに、青年は得意げに言った。

「魔物が力を付けるって言ったらどこの世界でも同じ。」

「……人を喰うんだよ。」

神は何も言わなかった。ただ、一瞬視線の先を青年から、青年の後ろでうつ伏せに倒れている少年に移した。青年はそれに気が付いた。

「ああ、あの少年かい？あの少年は僕が食べよう。どんなことをしてでも生きようとする人間は好きだよ。執念と血にまみれた魂は、また格別の味がするからね。」

少年は全身に血を被り、血に濡れた一振りの太刀と鞘を手に握っている。

青年は少年に近づいて側にしゃがみこみ、愛しそうに頬を撫でた。

「一体どんな味がするんだろうねえ。親しき者達の血に濡れた、この少年は。」

青年は立ち上がり、神のほうに向き直る。

「さあ神よ。最終通告だ。今ここで大人しく土地の力を僕に譲り渡して生き長らえるかい？それとも、僕達に無理やり奪われてここで死ぬかい？」

神は、何も考えることなく答えた。

「何度言おうと同じことだ。断る。」

「そうか。それは残念だ。面倒くさい儀式をしなければならないね。」

「その必要も無い。」

突然、ゴウン！と地面が大きく揺れた。青年はバランスを崩してその場にしゃがみこんだ。

神はただ、静かに微笑んでいる。

「何を…」

ここで青年は、後ろがやけに明るいことに気が付く。

「まさか！」

青年は振り返った。その目に映ったのは燃え盛る炎であった。

集落、田畑、山。全てが燃えていた。炎の中では、青年の部下達
がもがき苦しんでいる。

「これは神の炎だ。お前程度の妖怪がどうこうできるものではない。」

「貴様！自らの土地を燃やしてただで済むと思っているのか！」

青年は神に向かって叫んだ。高慢な口調を忘れるほど取り乱している。

「これは私の決断であり、この地の決断でもある。お前達に穢された土地を浄化するためにはこの方法しかない。お前もこの炎に身を焼かれるであろう。」

「ふざけるな！こうなれば貴様の力だけでも奪い取って…」

「その必要も無い！我はもうすぐ消える。この火災のために力を使い切った。愚かな若僧よ。残念だったな！ははははは！」

勝ち誇ったように笑う神はだんだんと輪郭がぼやけていく。そして、笑い声を響かせながら空気に溶けて消えた。

「くそ！何てことだ！」

青年は今何をすべきかを考え始めた。

魔術を使って火災を止めるか？無理だ。神が言ったとおり、自程度が神の災厄を止めることはできない。部下を集めて土地の力を無理矢理奪い取るか？これも無理だ。部下は全員炎の中だ。もう使い物にならないだろう。ならばどうする。どうやってこの場を打開する。

「……くそう！」

だめだ。予想外のことが起きすぎた。訳の分からん少年は部下を切り殺してくる。神は消える。土地は死ぬ！これでは任務が遂行で

きない！

「冷静に：冷静になるんだ。」

今から隔離結界の維持に努めれば外からは何も見えない。そして火事がおさまってからもう一度土地の力を奪い取ればいい。部下は本部から呼び寄せればいいだろう。

「とにかく、一旦ここから離れなければな。」

そう言っって青年が境内を去ろうとしたとき、

血塗られた刃が青年を貫いた。

「かつは！」

刃がひき抜けれると同時に、青年の体から急激に力が抜けていく。腹からはとめどなく血が流れ出す。

青年は振り向きながら、自らの鋭き爪を振るった。しかしそれは空を掻き、もう一度体を貫かれた。引き抜かれる気配は無い。

太刀を振るったのは少年であつた。

「う：が。が、きが。」

少年は何も言わずに、青年に深々と太刀を刺すだけだ。

「なん、だ。この、剣は。」

見ると、青年の体がどんどん細くなっていつている。いや、干からびていくという方が正しい。頬が窪み、眼球が飛び出し、手が骨ばってくる。やがて、青年は物言わぬミイラに成り果てた。

「ああ。」

少年は青年のミイラから太刀を引き抜くと頭上から振り下ろす。

太刀筋の上にあつた青年のミイラはいとも簡単に真っ二つに斬れた。すると、周囲の山々を囲んでいた光の網が消え去った。

少年は青年のミイラを見、破壊された社を見、そして燃え盛る集落を見、石段を下りて集落を目指した。

炎の中を少年は進んでいく。まるで周囲に炎が無いように、目の前に燃えた枝が落ちてきても、無数の火の粉が降りかかってきても、ゆっくりと、静かに、進んでいく。

少年は集落の前まで来ると、何の躊躇いもなく燃え盛る集落に入

った。集落の中では家や納屋は勿論、襲われた村人や、襲ってきた襲来者や、襲わされた村人が燃えている。ひどい臭いだった。何が燃えているのかなんて分からない、いろんなものが入り混じった臭いがする。

「みんな…」

少年は呼んだ。

「父さん、母さん…」

親を呼んだ。

「タカ兄、チヨ…」

兄と妹を呼んだ。

「ニムラ…コウ…ハマ…」

親友を呼んだ。

「ミサキ…」

想い人を呼んだ。

大きな涙を流しながら、震える声で、小さな声で、自分が斬り殺して行った者達の名前を呼んでいく。

やがて、その声は炎の轟音に飲み込まれた。

翌日。警察と消防が村に入った。そして、人々は戦慄した。

集落から見える範囲は焼き尽くされていた。森も、家も、田畑も、人も。しかし、それだけでは無かった。

集落の焼け跡に少年が立っていた。どす黒いまだらが浮かぶ服を着て、両手には一振りの太刀と鞘を持っている。

その少年だけが、異様に浮いていた。

三年前の別離（後書き）

お久しぶりです。紅炎です。

東方二次創説が一段落つきましたので投稿させていただきます。

中途半端に終わっていますが、これらは別の連載物を作ってまとめ上げます。その構想と終わりは大体できているのですが、物足りない感があるのでもっと練っていきます。

最期になりましたが、ここまで読んで下さった読者の皆様。ありがとうございました。今後もしよろしくお願いします。

ご指摘・ご感想を待っています。

御山邂逅、オヤマカイコウ、（前書き）

大遅刻

御山邂逅・オヤマカイコウ・

「アキちゃん。アキちゃん」

「なに？ ミユキちゃん」

四年一組の教室内。二人の女の子がおしゃべりを始めました。

「“お山のお化け”のお話知ってる？」

そう言うのはショートカットのミユキ。机に手を付いて身を乗り出して言います。

「“お山のお化け”？」

そう聞き返したのはロングヘアのアキ。席に着いていたところでミユキに話しかけられました。

「そうそう。この頃、“お山”にきつねさんや犬さんのお化けが出るんだって」

「えええ……。いやだなあ」

アキは顔を大層しかめながら言いました。

「家の近くじゃん。お化けが出るなんて」

「そう言えばそうだね。アキちゃんのお屋敷のすぐ後ろだ」

アキはお屋敷に住んでいるようです。ミユキの声音からすると、相当大きそうです。そのすぐ近くのお山、御山にお化けが出るようです。

「アキちゃん。アキちゃん」

「なに？ ミユキちゃん……。あ、ああ。うんうん。わかったよ」

アキはミユキの顔を見て、特にその瞳を見て、納得したように頷きながら答えました。その頷きには何やら“まただ”というような、少し困ったような表情が浮かんでいます。

対してミユキの顔には、いえ、顔ではなく目という方が正しいでしょう。ミユキの目がきらきらと輝いているのです。それはもう満天の星空のようです。星の輝きを目に止めることは出来ず、顔全体に散っています。それがさらに雰囲気にも散っています。意味は

少々違いますが、もつとわかりやすく言うならオーラと言ってもいいでしょう。

「わかったって、何がわかったの？」

「何って、ミュキちゃん、“お山のお化け”を見に行きたいんですよ」

「すごい！ どうしてわかったの！？」

「ミュキちゃんわかりやすいんだもん」

まったくその通りです。

「じゃあさじゃあさ！」

「うー。私怖いのは苦手だし。あんまり行きたくないなあ」

「えーえーえーえー」

ミュキは途端に不満顔になりました。可愛く「えー」を繰り返します。アキはその顔に少しだけニヤつきながらも、机にしがみつこうにしゃがんでいるミュキを嗜めます。

「それにお山は入っちゃ駄目なんでしょ？ ほら、一昨日先生から言われたでしょ」

「えーえー」

学校では一昨日から御山に入山しないように生徒に言っています。山の一部が崩れてしまっているそうです。他の場所も崩れるかもしれないから管理団体が入山を禁止しました。多分、今日も終わりの会で先生が言うでしょう。

「えーえー。こっそり行けば大丈夫だよ。それにお山が崩れたのはここから遠いって先生たち言ってたよ」

「でもさあ」

「うーうーうーうー。行こうー？」

ミュキは諦めません。一度決めた事は曲げたくない性格でしょうか。中々強情です。ここまで強情になるのならば一人で行ってもいいと思うのですが、ここは小学生の女の子。一人は寂しいようです。この調子ならほかの子も誘うのではないのでしょうか。もしくは既に誘ってあるかもしれません。

「うーん。じゃあ少し考えておくよ。だからそんな顔しないで」
「う、うん。ありがとうアキちゃん！」

今にも泣き出しそうな頬の緩み方に危機を感じたアキは、とりあえず答えておきました。このまま泣かれてしまつては面倒だなんて誰でもわかります。アキはミユキのふにやつとした顔をもう少し見ていたかったようですが、面倒なのが嫌なのは誰でも同じです。

「じゃあ帰ろうか」

「うん！　ほかの子も誘っておくね」

「あ、ああ。うん」

アキは何ともいえない表情でランドセルを背負います。頭の中では明日の返事を一生懸命考えています。ミユキは対照的な表情です。きつと、考えている事も対照的なんでしょう。

夕陽が廊下を照らしています。下校時間はもうすぐです。

アキは途中でミキと別れて、寄り道をせずにまっすぐお屋敷に帰りました。

長い影と一緒に進みます。舗装された道路から外れて家への一本道に入ると、両脇の草むらがより迫ってきました。横手には御山が横たわっています。アキはあんな話を聞いた手前、夕陽に照らされるいつも通りの山が不気味に見えます。

長い道が終わり、突き当りには門。通用門を抜けてお屋敷に入りました。石の敷かれた前庭を抜けて、玄関の戸をガラガラと開けます。

「ただいまー」

「お帰りなさい、お嬢さん」

中年の、少しふっくらとした体の女性が出迎えました。柔和な笑みを浮かべています。その笑みに向かって、アキは顔を赤らめながら言いました。

「お嬢さんはやめて下さいって」

「お嬢さんはお嬢さんなんです。ほかになんて呼べばいいんですか？」

「例えば！ た、例えば……」

アキは言葉に詰まりました。なんて呼んで欲しいかなんて考えていなかったようです。目が空を泳ぎます。手は虚しく握られたままです。

「やっぱり、お嬢さんはお嬢さんですよ」

「ナツさんの意地悪」

涙目で訴えられても、ナツさんは柔和な笑みを深めるばかりで動じません。アキの扱いに中々手馴れています。

「靴を脱いで、早く着替えてきてください」

「はい。あ、おばあさまは今どこにいますか？」

アキは靴を脱いで、奥に行こうとする奈津さんに聞きました。

「マキ様は奥座敷に行っておられます。しばらくしたら帰ってきますから、少しお待ちになってはどうですか？」

「わ、わかりました」

「お帰りになられたら、お嬢様をお呼びしますよ」

「お願いします」

アキはナツさんにペコリとお辞儀をして、パタパタと廊下を走って自室へと向かいました。

「奥座敷には行ってはいけませんよ！」

「わかってます！」

背から追ってきた奈津さんの注意に返事をしました。

最近、アキは奥座敷に立ち入る事を禁止されました。いえ、近づく事さえ許されていません。それはアキに限った事ではなく、この家に住むアキの両親や使用人たちも同じです。一部の使用人はアキの祖母から許されていますが、アキの知っている限りみんな男の人なのが気になります。

「何があるんだろう……ちょっと行ってみたいかも」

「駄目ですよ！」

ナツさんの地獄耳には驚きます。

アキは着替えて、宿題を片付けて明日の準備までしました。しかし、ナツさんはまだ来ません。あれから一時間は経っています。暇で暇でしよがなかつたので畳の上でごろごろして、それも飽きて窓を開けて庭を眺めます。武家屋敷のように整った、しかし自然の姿を忘れさせない庭は、庭師の腕前がとてもいいことを物語っています。

しかし、アキにはその良さはまだわかりませんでした。

「あー暇だよー」

「それならお稽古をすればよろしいのでは？」

いつの間にかふすまが開いていて、廊下にナツさんが立っていました。少々厳しい表情を浮かべています。アキはその表情に向かって、顔を赤くして言いました。

「勝手に開けないでくださいよ。びっくりしたじゃないですか！」

それに、お稽古は飽き飽きですよ。そう言うアキは、まるで噛み付いてくる犬のようです。猫で例えるならば、全身の毛を逆立てていると言えます。

「声はかけましたけど、返事がありませんでしたので」

「うぐ……お、おばあさまが帰ってきたんですか？」

逃げました。

「はい。自室で待っておられます。私からお話は通しておきましたので、すぐにお向かいください」

「ありがとうございます」

窓を閉めて電気を消して奈津さんの脇を通り抜けて、アキは廊下をパタパタと走ります。いくつかの角を曲がるとアキの祖母の部屋に着きました。

「おばあさま、失礼します」

声をかけてからふすまを開けます。中からの声が無いのはいつも通りです。

「いらっしゃい、アキ。とりあえず座りなさい」

「はい」

アキの祖母の部屋はお屋敷で唯一の洋室です。ですから、ここで床には座れません。ふすまを開くと洋室。何とも不思議な取り合わせです。アキはソファに座りました。

七十歳を超える高齢ながらもまだまだ元気なアキの祖母は、しわの少ない顔を優しく曲げました。長い白髪は綺麗に後ろでまとめられています。柔らかな肘掛け椅子に、深々と腰をかけています。

「それで、なにかしらアキ」

「おばあさまは、お山のお化けを知ってる？」

「ええ、噂になっているわね」

それで？ とアキの祖母は促します。

「本当、なの？」

「アキが本当だと思えば本当になって、嘘だと思えば嘘になるわ。アキしだいよ」

アキは、わからないと言う顔で祖母を見返した。アキの祖母はそれを底の见えない瞳で見返しました。

意地悪、とアキは呟きました。真意は計り知れませんが。しかし自分で考えなさい、と言う意味だとアキは受け取ったのです。

「ただし、行つては駄目よ。山崩れが起こつて危ないのよ」

「あ、はい……」

「どうしたの？」

「ううん！ なんでもない。あ、そうだ。おばあさま、なんで奥座敷に行つてはいけないの？」

それを聞いたアキの祖母は目を細め、イスから立ち上がつてアキの所まで来ました。しゃがんでアキと目線を合わせ、両手を頬に添えて、アキの視線を自らの目に固定させました。

「あそこには、ちょっと体の悪い子がいるの。だから奥座敷でゆっくり寝ているのよ」

アキは祖母の目から視線が離せません。何かで固定されてしまったかのようです。頬に、自身より少し低い体温をアキは感じています。

「だから、行っては駄目。静かに休ませて上げて」

「……子供、なの？」

「アキ」

ビクツと、アキは体を縮めました。微かに震え、しかし視線は動きません。まぶたの瞬きさえも忘れてしまったようです。

「行っては、駄目よ」

「う、うん」

いい子ね、とアキは頭を撫でられました。優しく、柔らかく、暖かい手でした。

祖母に言われたものの、アキの興味は治まりませんでした。やはり、気になる。祖母があそこまで隠そうとする相手とは誰なのか、気になる。子供特有の好奇心と大人にあまり知られていない行動力を以って、この謎を解きに行きました。

「こっちな……」

そしてアキは今、縁の下にいます。

誰にも見つけられないように縁の下を歩きます。発想が中々幼稚というか単純というか、しかしだからこそ、頭の固い大人たちには見つからない方法でしょう。

「奥座敷だから……あと少しかな」

奥座敷に行った時に見えた庭の景色を思い出しながら、廊下の長さを考えながら。アキは地面に手と膝を付いて進みます。

「わっ！　またくもの巣が……」

顔にかかった蜘蛛の巣を、顔を肩にごしごしと押し付けて取り除きます。実は体のあちこちにくつついていますが、気付いていないようです。服やスカートのあちらこちらは土や泥で汚れています。もちろん顔や地面についている手や膝も汚れています。

そんな被害を被りながらアキは突き進みます。

時折、頭上の床がギシギシとなりますが、その時だけ動きを止めて息を殺せば見つかる事はありません。それに、アキは見つかる心配をしていません。上を人が通ると言う体験は、むしろアキをわくわくとさせました。

足取り（足ではなく膝ですが）軽くアキは進みます。しばらくすると、夕陽に照る庭の雰囲気が変わりました。奥座敷に着いたのです。足音はしません。

「誰もいませんよーに」

そう呟いてアキはそつと縁の下から出て、こつそりと奥座敷を覗きます。周囲に大人はいません。

安心して立ち上がり、汚れを払って靴を脱いで上がります。

奥座敷はとても広いところです。大切な儀式をしたり、親戚一同を集めたりする時に使います。アキの親戚は手が十本あっても足りないくらいですから、その人数がすべて入る奥座敷はお屋敷で一番大きいでしょう。普段はふすまで仕切られて、いくつかの座敷に分けられています。

そしてアキは見つけました。ふすまの一切無い、一つの座敷となっている奥座敷の中心に座る、一つの人影を。

夕陽が奥座敷を照らします。しかし、人影は夕陽の照ると事からもっと奥にいます。つまり、暗くてよく見えないのです。奥を向いて正座をしているように見えます。背格好からしてアキと同じような歳でしょうが、それ以外はよくわかりません。

「ねえ、何してるの？」

アキはそう、声をかけました。人影はそれに答えません。

「おばあさまから病気だって聞いてたけど、寝てなくていいの？」

人影は微動だにせず、正座の姿勢を崩しません。

「もしかしたら寝飽きたの？　じゃあ一緒に遊ぼうよ！」

ぴくり、と人影が反応しました。微かなものでしたので、アキは気が付きませんでした。

「外に出て鬼ごっこしよう。きっと楽しいよ！」

ぱんつとアキは手を合わせました。嬉々とした表情で廊下から奥座敷へ足を踏み入れ、人影へ近づこうとしました。

「帰れ」

その足は、短い言葉によって止められました。少年のようですが少し高めで、鋭く、それはまるで光を反射する短刀のようです。それが、無防備なアキに突き刺さりました。

アキはその場で呆然と立ち止まっています。機嫌の悪くなるような事をしただろうか。そんな疑問が頭の中をぐるぐると回っています。

奥座敷は赤と黒と虫の音が支配します。

突然、少年が上を見ました。アキはビクッと体を縮め、少年の様子を伺います。

「人が来る」

少年はそれだけ言いました。

人が来る。そう聞いたアキははっとしました。祖母からここに来てはいけないと言われている事を思い出したのです。誰かに見つければ、絶対にお叱りを受けます。少年の言うとおりに誰か来るのであれば、早く帰らなければいけません。

「じゃあ私は行くね。また来るね」

「二度と来るな」

少年の冷たい言葉を背中に受けながらアキは縁の下に潜り、帰りました。

アキが帰ってから少しあと、少年の右斜め前のふすまが開いて男の使用人が一人、姿を現しました。手にはお盆を持ち、その上には一人分の夕食が載っています。

「修行は順調か？」

「……はい。瞑想をしていました」

使用人の問いに、少年は小さく答えました。使用人は少年を鋭い視線で観察します。頭の先から足のつま先まで。舐めるように隈なく見ました。

「特に異常はないようだな。何か変化があればすぐに言うように」
「はい」

使用人はお盆を入れてすぐの床に置きました。

「夕飯はここに置いておくが……こっちに來て食わんか？」

「いえ。ここで十分です」

少年の答えに、使用人は小さく嘆息しました。

前日、服を泥だらけ蜘蛛の巣だらけにして帰ってきたアキは奈津さんにどこに行っていたのかと追及されました。何とか誤魔化したアキでしたが、服が汚れるのを是としない奈津さんから、何とも形容しがたい目で見られ息苦しい思いをしました。

そんな事もあって、アキは御山の入り口に集まった子供たちの中で、一番ぐったりしていました。

「アキちゃん大丈夫？」

「ああ、うん。大丈夫大丈夫」

そう話しかけてくるのは「お山探検隊」の隊長を勤めるミュキです。

「それより、結構集まったね。やっぱりみんな行きたいんだ」

「うん。全部で十人だよ」

今日の学校でアキは、行くと言ってしまいました。怖いけどやっぱり興味がありましたし、何より昨日の祖母の言葉が気になってしょうがありません。

集まった隊員たちは男子も女子もいます。ミュキはほかのクラス

にも声をかけたのでしよう。知った顔と知らない顔が混じっています。山に入るのですから全員長袖長ズボン。虫除け対策や日焼け対策も万全なようです。もちろんアキもです。

「よし。みんな集まったね。それじゃあ、探検開始！」

ミユキの元気な声で一行は山に入りました。しかし、山に入るといっても、今回はしっかりとした道を歩きます。石畳の道です。もっと言えば、この道は参道です。

御山には神社があります。いつからあるかわからないぐらい昔からある神社です。とてもぼろぼろで神職の人もいません。この地域には氏子が創建した神社もありますので、多くの人、と言うより全員がそちらを詣でます。

何故そんな神社があるかは謎ですが、神様を祭ってあることには違いありません。

「薄暗いね……」

隊員の一人が言いました。

木々が密集して生えている御山では、昼でも薄暗いようです。空の青さが、ひしめく葉の隙間すきまから辛うじて見えます。

「何か……不気味」

鳥が唐突に鳴き声を上げて飛び立つ。風が吹けば太い木々が身を震わせ、長い枝々が鳴る。草がざわめく。さらに僅かですがひんやりとします。

「怖気づいたのかよ」

「違うやい！」

と、言いながらもそれぞれがびくびくとし、身を寄せ合っています。

「アキちゃんお化けいると思う？」

「いてほしくないけど……何だかいそう」

「だよね！ あ、そうだアキちゃん、学校で噂なんだけどね」

「どんな？」

その中で、先頭を歩くアキとミユキは何事も無いかのようにスタ

スタと歩きます。

ミュキは好奇心から怖いなんて思う暇はありませんし、アキはお屋敷のすぐ近くの山なのでほかの子よりも親しみが 있습니다。この二人だけ耐性があるようです。

「今年、小豆学級に一人入ったでしょ？」

「小豆学級？　へえ、そうなんだ」

ミュキがアキに話しかけました。

二人の話す小豆学級とは、小学校にある特別学級の事です。様々な事情から一般の生徒と共に授業を受けられない子供がそこで勉強します。

「変わった子らしいよ。いつも長袖長ズボンで、誰とも話さない人だって。いつも一人で黙ったままだって。しゃべっても何を言っているのか分からないし」

「へー。ミュキちゃん気になるんだ。その子のこと」

「ち、ちがうよ。ただちょっとだけ気になるだけ」

「不思議な子、好きだもんね。ミュキちゃんは」

うー、と言って腕を振り回すミュキ。その姿が可笑しくて、怖がっていた隊員たちは怖さを忘れて笑います。そうして誰かが茶々を入れてミュキがいにじられ、また笑いが起こります。すると、いつの間にか怖さと言うものが隊員たちから消え去っていました。

一行はそのまま突き進み、途中から現れた石段を元氣よく登って行きます。そして石段の途切れが見えてきた頃、再び静かになりました。

今回の目的地は神社です。決めたのはミュキ。一番お化けが出そうだから、だそうです。可愛い発想です。

一行は石段を登り切りました。すぐそこにある色の剥げた鳥居をくぐり境内へと足を踏み入れます。

社は風雨に晒されて劣化しています。左右に座す狛犬も元の石の色が分からないくらいになっています。しかし、雑草があったり落ち葉が積もっていたり、木が倒れていたという事はありません。

そういった物は全くないのです。

もしかしたら、意外ときれいなところだなと思うかもしれませんが、ここまで生きた者のにおいがしないと逆に荒んでも見えます。つまり、ここは荒れているのです。

特に子供は、そう言う事を感じ取りやすいのです。

「怖い……」

一人が呟くと、他の隊員にも瞬く間に伝染しました。この時ばかりは二人も例外ではありません。

「ミユキちゃん。お化け、いないね。もう帰ろうか」

「なに弱気になってるの！ 少し待って……」

ざあ。ざあ。ざあ。ざあ。

一陣の風が境内を通り抜け、周囲の枝葉を揺らしていきます。石畳に映る陽の影が、ゆらゆら揺らめきます。そして静かに唐突に、揺らめきが終わりました。それと同時に小鳥の声が消え去りました。

「な、なんだあれ」

隊員の一人が指さしました。その先には社が、いえ、何かわからない黒いどろどろがありました。それは地面から染み出るように姿を現し、周囲に広がることなく縦に伸びていきます。それは1メートルほどの高さを取り、だんだん形をはっきりとさせていきます。

「お、お化けだ！」

「いたんだ。ほ、本当に……」

黒い物は大きな犬のような形を取りました。しかし、表面はまだどろどろが流動しています。

一行は蛇に睨まれた蛙のように身をすくめ、寄せ集まり、震え、冷や汗をかき、顔を青くし、歯を鳴らし、ただじっと黒い物を見つめます。

表面の流動が収まり、黒い物の空ろな眼窩が一行を見つけました。口をぱくりと開け、暗い口内を覗かせ、そして。

「――――」

声とも取れない奇妙な音。雄叫びでしょうか。黒い物は天に向か

って長い長い雄たけびをします

「うわああああああ！」

隊員の一人が叫びました。それに続いて他の隊員も次々と叫び声、というよりも泣き声をあげて、先程登ってきた石段を駆け下りて逃げます。

アキも逃げようと踵を返します。しかし、足に何かが引っかかりました。正面から地面に倒れてしまいました。その間にほかのみんなは、石段を駆け下りて行きました。

境内に残ったのはアキ一人です。それと黒い物。

アキは周囲に視線を巡らせました。巡らせてしまいました。

黒い物と目が合ってしまった。

黒い物にはやりと口を歪め、べちゃ、と足を進めて秋に近づきます。

獣特有のにおいのする息がアキの鼻腔に侵入します。

アキは動けません。黒い物の目から視線が離せないのです。

歯が鳴り、体が震え、背筋に悪寒が走り、湿った音が耳を傷め、指先が冷え、周囲から現実味が消えていきます。

あと数歩。黒い物がアキに届くまでそれだけとなった時、黒い物が後ろに飛ばされました。

「――」

アキと黒い物の間に転がっているのは、こぶし二つ分はあるゴツゴツとした大きな石。

「何故ここに」

くぐもった声がアキにかけられました。

「立ち入り禁止のはず」

アキの背後から、同年代と見られる少年が歩いてきました。狩衣姿で、顔には狐面を被っています。

「疾くと去れ」

そうして、少年は黒い物へと飛びかかりました。黒い物もそれに応じます。黒い物の爪が少年を襲います。少年はそれを難なくかわ

し、突き出された腕を掴んで放り投げました。

投げられた黒い物は湿った音と共に地面に激突し、少年は最初に投げた石を拾い上げ、黒い物に投げつけます。黒い物は体を流動させて石を体内に取り込み、口からそれを勢いよく吐き出しました。少年は首をかしげてやり過ぎします。石は後ろに会った太い幹を削り取りました。

少年はどこからか木の棒を取り出し、それを構えて黒い物へと突っ込みます。しかし、木の棒は黒い物に噛みつかれ、砕かれてしまいました。少年はすぐさま下がろうとします。

「あ」

しかし、少年は足を滑らせて体勢を崩しました。黒い物はその隙を逃さず瞬時に間合いを詰めて口を開き。

「ああ！」

アキの叫び声。そしてぐしゃり、という無残な音が境内に響きましました。

「結局、これか」

そう呟いたのは少年。鋭い爪を持つ獣の腕になった自らの左腕を見つめ、次に叩き飛ばされた黒い物に視線を移しました。しかし土ぼこりが舞ってよく見えません。

「なに……そ、れ」

少年の腕を見たアキはそう言いました。それを見た少年は、少し悲しそうに言います。

「去れ」

気づけばアキは動けるようになっていきます。今なら逃げられます。アキは足に力を入れて立ち上がろうとしました。しかし。

「————」

土ぼこりの向こうから黒い煙が流れてきました。それは地を這い、少年を取り囲み、そしてアキを取り囲みました。

「あ————」

煙に触れたアキは全身から力の抜ける感覚を覚え、腕が折れ、目

の前が暗くなり、意識を手放し、石畳にドサツと倒れ込みました。
「気絶、か」

少年は倒れたアキを見てそう呟き、土ぼこりの中から出てきた黒い物を見ます。煙が黒い物の方へ逆流し、吸い込まれていきます。

「吸収か。効かんが、やりやすくなった」

少年は構えます。

「祀られる者」

黒い物は煙を吸い切り、少年を見てにやりと笑います。次の瞬間には少年に跳びかかり、凶悪極まるあぎとを開き、喰らいつこうとしました。

少年はそれをギリギリまで引きつけ、素早く腕を振います。

「今しばらくお引き取り願う」

鋭い爪が口から尻まで切り裂き、黒い物は霧散しました。

アキが目を覚めたのはその日の夜。お屋敷の自室でした。ナツさんに具合を聞かれ、大丈夫だと伝えると、アキの祖母の部屋まで連れていかれました。そこにはアキの両親もいました。

「アキ。最初に言う事は？」

「ごめんなさい」

「よろしい」

祖母は両親を退室させ、話し始めました。

「御山にお化けはいたのかしら」

「あ、うん……。犬さんのお化けが、いたよ」

「そう。それ以外には？」

アキは悩みました。アキ自身、あの少年が本当にいたのか自信がないのです。本当は夢だったのかもしれない。あんな人がいるはずない。そう思えてならなかったのです。

しかし、夢とするにはいささか現実味を帯びすぎているとも思っ

ています。どちらなのか、全く分からないのです。

「……いたよ」

「どんな？」

アキは、意を決して話すことにしました。

「きつねのお面を被った、男の子。」

「ほかに特徴は無かった？」

アキはしばし口を開閉させ、喉の奥から言葉を引きずり出しました。

「腕が……変だった」

それだけしか言えませんでした。

「そう。じゃあアキはその子を見て、どう思った？」

思ってもいない質問に、アキの頭の中は真っ白になりました。しかしながらも、アキは懸命に思い出そうとします。あの時、なんて思ったのか。

「……怖い、怖かった」

それと、とアキは強く続けます。

「悲しかった。何だか悲しそうだったから、私も悲しくなった」

そう、とだけアキの祖母は呟きました。それからアキの祖母は立ち上がり、座っているアキをぎゅっと抱きしめました。

「きつと、アキが怖いって思ったから悲しかったのよ。だれも、みんなから怖がられたくないもの」

夜の奥座敷。灯りは一切ない。その中心で、アキの祖母と少年が正座で向かい合っていました。

「孫を助けてくれてありがとう。心から礼を言うわ」

「いえ」

暗いなかでもアキの祖母は少年の無表情をはっきりを見ることができません。先程から変化はありません。

「それなのに悪いんだけど、あなたの居を変えることにしたわ」
「何故」

「妖気に触れて、あの子の秘密が表面化するかもしれない。あの子がここに来たんでしょう？ あなたにどんな影響があるかわからないわ」

ぴくり、と少年に同様の色が浮かぶ。アキがここに来たのは誰も知らないはずなのに、アキの祖母が知っていたからでしょう。

「封印は」

「限界があるの。あの子の秘密は強すぎる」

「修業ですか」

「そうね。仕方ないわ」

アキの祖母は残念そうに言いました。

「そう言う事だから、明日にでも御山の奥屋敷に移ってもらおうわ」

「いえ、今すぐにしましょう」

アキの祖母は訝しげに聞きます。

「どうして？ 疲れているでしょう」

「大丈夫です」

一呼吸置いて少年は言いました。

「俺は、獣ですから」

御山邂逅・オヤマカイコウ・（後書き）

どうも、紅炎です。いい加減一発変換で出てほしいです。

さて、まずは謝罪から。すみませんでした。八月中に出すとか言っ
といて今九月だよ。遅刻遅刻。大遅刻。ああごめんなさい。待って
いた人すみません。

今作品について。小4がどんなものか全くわかりません。先輩に聞
いたら「妙に賢くなっていて生意気」と返ってきたので、こんな感
じだ！ と勢いで作りました。誰か指摘してください。

ただいま「魔術師の細々話」も執筆中ですがいつ完成するかは全く
分かりません。どうしましょう。

また後で恋愛系？の短編を上げたいと思います。何でそんなん書い
てんだよって話ですけどね。どうでもいいことです。

さて、何かどこかで話したような気がします。もう一度話しまし
ょう。

「脳内世界」は魔術師に関する短編集で、これらが全て一つの作品
になるわけではありません。当初の予定では二つ。今は三つを予定
しています。他の所に違う事が書いてあったらお知らせください。
速攻で修正します。

何か脈絡のない文章になっちゃいましたけど、この辺で失礼します。
最後まで読んでいただきありがとうございました。
ご感想・ご指摘お待ちしております。

0
9
／
1
7
(土)
修正

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5634r/>

マイ ブレイン ワールド

2011年11月15日03時47分発行